発達理論の学び舎

Back Number: Vol 291

Website:「発達理論の学び舎」

No.234 雨後の愛撫（その2）_Caress after the Rain（Part 2）

© YOHEI KATO 2020

目次

5801. 自分でもわからないことに従事し続けること:今朝方の夢

5802. 良縁の循環:仮眠中のビジョン

5803. 早朝世界の美しさ:生命の流れとしての旋律と筆

5804. 生命運動としての自然な創作活動:その人を偽りなく語る表情と目

5805. この世界の外に立つこと:常人と狂人

5806. 今朝方の夢

5807. 幼き日に決定しているもの:円環かつ縁環としての人生

5808. 命の流れと命の鼓動:名付けについて

5809. 凡夫の世界からの目覚めを象徴する今朝方の夢

5810. 今朝方の夢の補足:内的感覚生命

5811. 今朝方の印象的な夢:おどろおどろしい無意識の世界と大学入試

5812. 今朝方の夢の続き

5813. 悪行の導引と人間社会

5814. 月での生活:意識の拡張と意識の超出をもたらす美的体験

5815. 地球の命と遠い未来の生命体

5816. 今朝方の夢

5817. 絶えず破滅の縁に立ち続ける人間と人間社会

5818. 今週末に注文予定の書籍

5819. 贈り物を授けてくれた恩師、元ハーバード大学教育大学院教授カート・フィッシャー氏の追悼

5820. カート・フィッシャー教授の追悼論文集:今朝方の夢

5801. 自分でもわからないことに従事し続けること:今朝方の夢

時刻は午前5時を迎えた。今、空がダークブルーに変わり始め、遠くの空にまん丸の満月が浮かんでいる。太陽の光を反射して輝く満月をぼんやりと眺めている。

開けられた書斎の窓からは、小鳥たちのさえずりが流れ込んでくる。今の外気の温度は2度と低いが、それほど寒さを感じない。明日は今日と同じぐらいの気温であり、明後日と明々後日は少し気温が上がる。だが今週の日曜日からまた気温が下がる。今週の日曜日は最高気温が10度に達しない。まだまだ肌寒さの残るフローニンゲンだ。

昨日は午前3時前に起床したが、本日の起床は午前4時とゆったりとしていた。とは言え、これくらいの時間帯に目覚めることができれば、日中には思う存分に活動ができる。ここ最近は夜の食事量を以前よりもさらに気持ち減らすことによって、睡眠の質が高まり、起床時間も安定的に早くなっている。やはり睡眠中に消化にエネルギーを使わないことの大切さを思い、そうした食事量を心がけることの重要さを思う。量は少なく、それでいて栄養をきちんと補給するような質の食事が重要だとわかる。

天気予報を確認すると、今日のマークは、今まさに眺めている満月のように、まん丸とした太陽のマークであり、雲ひとつないような快晴の1日になるようだ。そのため、午後に街の中心部のオーガニックスーパーに行こうと思う。玄米味噌、椎茸、豆乳、チーズ、4種類の麦のフレーク、ゴマペーストを購入する。後者3つは全てバイオダイナミクス農法で作られたものだ。

昨夜、自分でも毎日なぜこうも日記を書き、曲を作り、絵を描いているのかわからないことについて考えていた。自分でもわからないことに没頭している自分がいる。わからないこと。それこそが天命なのかもしれない。一方でわかることとはなんだろうか。それは自分の狭い度量衡で理解できる類のものであり、そこには多分に自分以外の何者かによって構築された虚構の物語が混入している。そんなことは天命たり得ない。そのようなことを考えていた。

人生の一回性。次にそれについて考えを巡らせていた。この人生はこの人生として一つの全体性を持っており、自分の肉体が朽ち果てれば、肉体を通じて参与していた部分のこの人生は終わる。そうした有限性を持っているのがこの一回限りの人生である。自分は天命として与えられたこの意

味の分からぬ創作活動に全てを捧げていく。天からの贈り物の意味がそうたやすく理解されるはずはないのだ。自分の理解を超えているが、それでいて自分を捉えて離さないもの。それに従事し続けていく。

今朝方も少しばかり夢を見ていた。夢の中で私は、中学校時代のバスケの新人戦が行われた市民体育館にいた。実際にはコートの上に私は立っていて、今から試合が始まるところだった。私の周りには部活のメンバーがいて、相手はまさに新人戦の初戦の学校だった。試合開始後、思っていた以上にお互いにゆっくりとしたペースで試合に入ったことにすぐに気づいた。そのゆったりとしたペースは長く続き、お互いに様子を見る時間帯が続いていた。そんな中、同じチームの親友(HS)がフリーで絶好機にも関わらず自分でシュートを打たないことに私は疑問を感じており、彼に近づいて彼を励まし、もっと積極的にシュートを打てと伝えた。するとそこから彼は自信を持ったのか、積極的にシュートを打っていくようになった。

試合の途中から、不思議な形でゲームが動き始めた。私の手元には薄っぺらい楽譜があり、シュートと同時にその楽譜をリングの上の平台に積み重ねていくことが求められていたのである。手元の楽譜がどのようなものかを確認すると、聞いたことのない作曲家の楽譜であり、名前がカタカナで表記されていたので、その楽譜が日本語のものだということがわかった。私はシュートを放った後、ダンクシュートができる以上に高くジャンプをして、その楽譜をリングの上に置いた。すると、その前に置いていた楽譜がズレ落ちてきてしまいそうだったので、それらの楽譜をきちんと積み重ね直し、新たに1つ楽譜を追加する形で積み重ねた。そのような夢を今朝方見ていた。フローニンゲン:2020/5/6(水)05:29

5802. 良縁の循環:仮眠中のビジョン

時刻は午後7時を迎えた。ちょうどつい先ほど夕食を摂り終えた。今、小鳥たちが夕暮れ時を祝福するかのように美しい鳴き声をあげている。この時間はまだ夕日が燦々と輝いている。

昨日意識的に観察をしていたところ、就寝準備を始める午後9時半にはまだ夕日が完全に沈んでいなかった。もうそれくらいに日が伸びた。

優しげな風が吹いている。それは幸福を運んできてくれるかのようだ。

今日は昼前にオンラインミーティングを行った。とある領域の第一人者の教授と初めてお話をさせていただき、お互いに多くの共通点があり、話が盛り上がった

ミーティングを終えてしばらくその余韻を味わっていると、良い縁の循環が生まれているように思った。新たな良縁が生まれ、それが育まれているのを感じる今日この頃である。

午前中に作曲実践をしていると、作曲語法の確立プロセスにおいて、武道の達人の身体感覚と身体動作を真似るかのように、作曲家の身体感覚と身体動作を自分の内側に取り入れていくことについて考えていた。それをより意識的に行い、自分独自の身体感覚と身体動作を磨いていこう。日々の1つ1つの作曲実践はそのプロセスだ。

兎にも角にも身体感覚を通じて音楽を理解していき、曲を作っていく。こうした身体感覚の重要性は、もちろん絵画の創作にも当てはまる。実際に自分の身体を用いて筆を使って絵を描くのだから、なお一層のこと身体感覚が重要になるのは明らかである。身体感覚を涵養していくための生活をこれからも続けていく。今生活している環境のように、時の流れが緩やかで、落ち着いた場所で日々学習と実践を続けていく。

午後の仮眠の際に、興味深いビジョンを見ていた。それは、4声のコラールを作っているビジョンだった。ビジョンの中に楽譜が現れ、1つ1つの音までかなりはっきりと見えた。そのビジョンを知覚している最中、これは仮眠から目覚めてもそっくりそのままそのビジョンの音を再現できるのではないかと思っていたぐらいだ。仮眠中にはそのような意識があり、それでいて明確なビジョンを見ていた。コラールは早朝の作曲実践の際に準備運動として1、2曲作っている。そして仮眠から目覚めた後も、午後からの作曲実践の準備運動としてさらにもう1曲作っている。

午後に作ったコラールは、仮眠中のビジョンを再現するには至らなかったが、何かしらの影響を受けていることは間違い無いだろう。今後もビジョンや夢の中に作曲風景が映るかもしれない。ビジョンや夢をもとに本格的に曲を作っていく日も近そうだ。

今週末の予定としてふと、今道友信先生の音楽美学に関する書籍を再読しようかと思った。ここ最近は意図的に読書から離れており、1日のうち15時間ぐらいを創作活動に充てている。というよりも、トイレや食事を除いたら、全ての時間を創作活動に関することに充てているので、15時間以上の時

間だと言えるかもしれない。そのような生活を毎日続けているが、今週末のどちらかの午後に少し時間を取って、先生の書籍を読みながら考えを日記にまとめていこうかと思う。もちろん今週末のことは今週末になってみないとわからないため、この計画も変更するかもしれないが、近いうちに先生の書籍を再読しようと思っていることは確かだ。フローニンゲン:2020/5/6(水)19:28

5803. 早朝世界の美しさ:生命の流れとしての旋律と筆

時刻は午前5時半を迎えた。午前5時あたりのことを思い出すと、その時には、ダークブルーの空に見事な満月が浮かんでいた。ところがこの時間帯になってしまうと、もう空が明るくなっており、満月は見えなくなってしまっている。早朝に満月が見れることは、早起きの特権のようだ。あのような美しい満月を見れるのであれば、それは早起きをしたくなってしまう。そうなってくると、夕食を軽めにして就寝中に消化活動にエネルギーを充てないようにすることや、就寝前に脳を十分に休めるようにしてから就寝に向かおうとすることも理解できる。それらは全て、翌日早く起きるために必要不可欠なことであり、早く起きて早朝世界の美しさを堪能し、その感覚を持ったまま1日の創作活動を始めるためなのだ。

このところは、書斎から見える景色も随分と彩り豊かになった。とりわけ、新緑の生命が持つ力強さには目を奪われる。新緑の木々に小鳥たちが集まってきて、そこで奏でられる合唱も見事だ。それは派手さはないかもしれないが、心を深く大いにくつろがせてくれるには十分である。それは心と魂の癒しと肥やしをもたらしてくれる。今も小鳥たちは、私に癒しと肥やしを与えてくれている。彼らは本当に1日中美しい鳴き声を上げ続けてくれているのだ。そんな彼らに感謝をし、自分にできる返礼をしていこう。創作活動に勤しむことが間接的な返礼である。自分がこの世界に対してできることは、それしかないのだから。

新緑の木々たちは、今早朝世界に静かに佇んでいる。今朝は風がなく、彼らの佇まいは凛としている。果たして、私たち人間の佇まいはいかほどのものだろうか。そこに凛とした佇まいはあるだろうか。

一昨日の夜にふと、今から5年ほど前に1年ほど日本で生活をしていた時、父方の祖母の家に足を運んだことを思い出した。その時に祖母が、「人生が充実していることを示すいい表情をしている」と

述べてくれたことを覚えている。表情、そして眼にはその人の全てが現れる。しけたつらではなく、活き活きとした表情。死んだ魚の目ではなく、精気に満ち満ちた瑞々しい目。ふとした時に私は、自分の表情と目を確認することがある。そこには生命力に満ちた顔と目がある。

この話から派生して、昨日は、作曲実践中に、旋律について少しばかり考え事をしていた。端的には、旋律は命の流れとして捉えることができる。そしてそれは、絵画の創作における筆の流れと似ている。旋律も筆も、どちらも生命の流れなのだ。そうした観点で作曲と絵画の創作に取り掛かっていこう。そして絶えず、自分の生命の流れがいかなるものかについて意識を向けておこう。そうした流れそのものを育んでいくことも合わせて行っていく。生命の流れという観点は、鑑賞の際にも保持しておこう。作曲家や画家たちがどのような生命の流れを持っていたのか。そしてそれをどのような形としてこの世界にあらしめたのか。そうした点にも関心を持っておきたい。フローニンゲン:2020/5/7(木)06:03

5804. 生命運動としての自然な創作活動:その人を偽りなく語る表情と目

今日もまた天気に恵まれるようだ。朝からウキウキとした気分になってしまう。晴天に恵まれ、創作活動に打ち込めること。それがどれだけ有り難いことか。

毎日が充実感と幸福感の流れの中で進行していく。それは本当に水の如しである。日々は充実感と幸福感の水流である。それそのものが水流なのだ。そしてそれはどこかに向かって流れており、自分の人生という1つの水脈は、他の水脈と重なり合っていく。そしてそれはいつか大海になるか、大海に還っていくことになるだろう。

朝日が赤レンガの家々に照り始めた。今日も始まる。今日も自らの命を感じながら創作活動に打ち込んでいく1日が始まったのである。

創作については気張る必要は全くない。今行っているような深くゆったりとした呼吸のように創作活動を進めていけばいいのである。あるいは、今ここに自分がただ静かに在るように創作活動を進めていけばいいのだ。創作活動は何も特別なことではないのだ。それは呼吸と同じものであり、今というこの瞬間に在るのと同じなのだ。それがわかれば、創作活動を特別なものだと思うのは馬鹿げたことだということがわかる。

多くの人は、これまでの教育や社会からの働きかけによって、自らの生命の流れを形にしていく創作活動が何か特別なものだと思わされている。その結果として、自分の生命の流れに気づかず、それを形にする機会を奪われているのはとても残念なことである。

フローニンゲンの静かな早朝世界が何かを自分に語りかけてきている。その声を聞こう。そしてそれを形にしていこう。

早朝に目を瞑りながら内側の感覚に意識を当ててヨガの実践をしていると、午後の仮眠中に知覚するような色鮮やかなビジョンが少しばかり見えていた。前半においては、それは絵画的イメージとして立ち現れており、自分が絵を描いているような情景が浮かび上がっていた。その後には、昨日の仮眠と同様に、楽譜が脳内に現れ、音楽を作っていた。創作を司る感覚が徐々に開いてきていることを実感する。また、創作の元になるものが内側から外側に向かって流れ出していることを感じる。感覚の開放と内側の創造的根源の湧出。それが今の自分に起こっている。日々の充実感と幸福感の根源にはそうした現象がある。そして、そこで得られた充実感と幸福感は、自分の表情と目から溢れ出している。

これまでの自分の専門性ゆえに、とりわけ発達測定という言語に注目をした活動を続けてきたがゆえに、目の前の人が何をいかように話すのか、つまり言語を用いてどのように内面世界を形作っているのかに自ずと意識が向かう傾向にあるが、私が相対した人の何をまず見るかというと表情と目である。そして、その人の存在が醸し出す雰囲気、専門用語で言えば、サトルエネルギーがどのようなものかに注目をする。発達測定の専門家の間で言われているように、発話内容はいかようにも偽ることはできるが、発話構造は偽ることができない。その人の発達段階は、発話構造から如実に映し出されるのだ。実はそれよりも明々白々にその人の存在を語るのが、表情と目、そしてサトルエネルギーなのだと思う。フローニンゲン：2020/5/7（木）06:20

5805. この世界の外に立つこと：常人と狂人

朝日を存分に浴びながら早朝の青空を優雅に舞う1羽の鳥がいる。書斎の窓辺に近寄って、街路樹に止まるスズメがいたのでそれを眺めていた。スズメの口元を見ると、土色の紐の塊のようなものを口にしていた。それは重くなく、どこか軽そうだった。枝に止まったスズメの口からそれが地面に

ひらひらと落ちていった。すると、スズメは飛び立ち、隣の家のニコさんの庭の餌箱の方に向かって行った。

あのスズメは何のために、あの紐の塊を口にしていたのだろうか。そこでふと、彼はきっと立派な巣を作りたかったのではないかと思った。この季節は新たな生命が誕生する時期でもある。新しく生まれてくる命のために、立派な巣を作りたかったのではないだろうか。きっとそうかもしれない。彼が向かった餌箱も、自分の食欲を満たすというよりも、生まれてくる新たな生命のために餌を求めたのかもしれない。

先日、近所のスーパーに向けて近くの住宅地を歩いている最中に、運河の箇所で思わず足を止めた。運河の水面で、アヒルのような鳥が巣作りをしていたのである。ベンチには、その光景をぼんやりと眺めている男性がいた。こうした光景をここではよく目にする。アヒルたちが巣作りを一生懸命に行っていて、それを見守りながらにしてぼんやりと眺める人々がここにいる。先ほどのスズメも、やはり巣作りに一生懸命になっているのだろう。

懸命に生きること。しかも気張らずに、自然な形で懸命に生きる姿は本当に素晴らしい。だが私たち人間は、ただ懸命に生きるだけではダメなのかもしれない。その方向性がいかなるものであるのか、つまり懸命に生きるに値する活動がどのようなものかを見極めていく必要があるように思う。端的には、賢明にして懸命に生きることが私たちに求められているのではないかと思う。その際に必要なことは、外に立つことである。既存の自分の認識の枠組み、社会がこしられた様々な枠組みから外に立つことが求められる。

この社会は、集団偽装的かつ集団欺瞞的な枠組みで満たされている。先ほど大麦若葉のドリンクを作っている最中にそのようなことを思った。その時にふと、昔の記憶が蘇った。あれは中学3年生の冬のことだったと思う。私が生活をしていたのは相当に田舎な場所であり、中学校に関しても受験という雰囲気はほとんどなかった。もちろん高校受験はあったが、地方の田舎の中学校にとって、高校受験などは運動会や文化祭ぐらいのイベントだったと認識している。

そのような場所で生活をしていながらも、隣街には進学塾があって、そこには進学校に行こうとする生徒たちが近隣の様々な学校から集まってきていた。私は自転車で通える距離の高校に行こうと

思っていて、別に進学塾などに行く必要は全くなかったのだが、冬休みの1週間ほど、その塾にどのような生徒が集まっているのかが知りたくなって、母にお願いして、その塾の冬季講習だけに通わせてもらうことになった。

先ほどの日記の中で言及していた目の話を受けてか、講習会の前に面談役を務める塾の講師と三者面談をする機会があったことを思い出した。進学希望先の高校を用紙に書き、それをその講師に渡すと、「えっ、ここ？」というような表情をしていた。その塾に集まる生徒たちは隣町の進学校に通うことを目指す人たちばかりであり、私はとにかく自転車で行ける距離にある高校にしか通うつもりはなかったので、その塾の冬季講習に参加している生徒の中で、唯一私だけが違う高校名を進学希望先に書いていた。

その講師の表情が印象に残っているだけではなく、その講師の中年男性が述べた言葉も覚えている。「君は相当にデキそうな目をしてるね…。でも本当にこの高校なのかい？」そのような言葉を掛けられたことが今でも印象に残っている。そしてさらに印象に残っているのは、講習会の前に実力テストのようなものを受けさせられ、一応私は一番上のクラスに入れたのだが、その講師から後日、「思っていたほどには点数が良くなかったね（笑）」と言われたのを覚えている。なぜかその時の記憶が先ほど思い出された。

受験というのはつくづくオリンピックのようなものであり、特殊なトレーニングをすればそれだけその競技の力はつく。逆に言えば、そうしたトレーニングをしている者としていない者との間には、理解ができないほどの差が生まれる。当時の私は受験用の勉強など全くしていなかったので、実力テストで点数など取れるはずはなかったのだ。このエピソードを改めて俯瞰的に眺めてみると、多くの人は大なり小なり、成人になって以降も、随分とくだらない競技ないしはゲームに従事させられていることが見えてくる。それは自己を既存の枠組み、そして社会の枠組みに押しとどまらせ、その枠組みの中で生きていくことを強制するような類のものである。また、そうした競技やゲームは、それに従事すればするだけ、心身さらには霊性が蝕んでいき、気がつけば、誰のものとも知らぬ人生を送ることを余儀なくされることになる。

重要なことは外に立つことであり、そうした競技やゲームの外からそれを眺め、競技やゲームを生み出した構造を把握することである。そこからさらに重要なことは、懸命に生きるに値する活動を見つ

け、それにひたむきに取り組み続けることである。自分にとってみれば、受験というのは懸命に生きるに値する活動では決してなく、それをして自分の心身や霊性が喜び、育まれていくとは到底思えない。拝金主義的な他の活動全般もそうだ。

今毎日従事している創作活動はどうだろうか。確かにこの社会においては、芸術活動までもがカネや権力と結びつき、競技性やゲーム性が持ち込まれているが、自分はそのような形で創作活動に従事していない。そして今後も決してそのようにはしないだろう。自らの生命の流れを形にし、日々生きた証を形にすることが、どうして他者と比べられるようか。どうして他者と競えようか。

自己の枠組みや社会の枠組みから超越した活動に従事し続けること。それをこれからも続けていく。他者や社会がこしらえた不毛な競技やゲームの外に立ち、そうした活動に自らの生命時間を使わないこと。自らの生命の燃焼が、即自己の人生の軌跡となること。それをもたらす活動だけに従事すること。

この世界はなぜこうも自分の考えとは逆の方向に動いているのか。いつの時代も、その時代の枠組みから超出した人間を気狂いだと述べるが、数百年、数千年後においては、そうした人間が全くの気狂いではなかったことに気づく。その時代の狂人は後の常人であって、その時代の常人は後の時代の狂人なのだ。フローニンゲン:2020/5/7(木)07:12

5806. 今朝方の夢

時刻は午前7時を迎えた。朝日が燦々と照り始め、世界が活き活きと動き始めた。

今日は水曜日らしい。いや、木曜日だった。

コロナの影響もあってか、平日のこの時間帯は道ゆく人の数も少なく、まるで休日の朝のようだ。この落ち着き。こうした落ち着いた環境の中で自分の取り組みを日々少しずつ前に進めていくこと。そうした生き方を今後一生涯を通じて行っていく。

振り返ってみると、日米欧の様々な場所でこれまで生活をしてきた。そうしたことを経て、自分がどのような場所で日々を生きていくのかが望ましいのかが見えてきている。1年でアメリカに戻ろうと

思ってやって来たオランダは、いつの間にか自分の永住先の1つになった。もう1つの永住先は、今のところフィンランドになるだろうか。オランダと対置させる形でもう少し暖かい場所でもいいかと思ったが、どうも私はフィンランドに惹かれるものがあるようだ。仮にノルウェーがEU諸国であれば、ノルウェーも候補に入っていただろう。欧州永住権の都合上、ノルウェーは残念ながら今のところ永住先にはなり得そうにないが、今後この国がEUに加盟することもあるかもしれない。

ノルウェーにおいてはグリーグが、フィンランドにおいてはシベリウスがそうであったように、自然の中に居を構え、そこで日々の創作活動に励む生活をいつか送りたいと思う。そうした生活を通じて、常に利他的に生きていく。利他的な行為としての創作活動。それを常に忘れないようにする。

そう言えば、今朝方の夢についてまだ振り返っていなかった。それについて振り返り、そこから早朝の創作活動を始めていこう。夢の中で私は、人気の少ないオフィス街を歩いていた。その日は平日の午後の時間であり、その時間であればオフィス街に人が多くいてもいいはずなのだが、どういうわけかほぼ全く人の姿を見なかった。

私の隣には2人ほど知人がいて、彼らと私を除けば、そのオフィス街には人はいなかった。しばらく歩くと、立派なビルが見えた。それはいかにも一流企業が入っていそうなビルだった。どうやら私たちはそのビルに用事があるらしく、ビルの中に入っているみると、そのビルもひっそりとしていて、そこもやはり人の姿はなかった。

1階のエレベーターホールでエレベーターに乗り、上の階に私たちは向かおうとした。そのエレベーターはガラス張りであり、外の様子が中から見える。目的階のボタンを押し、ドアを閉めたところで、小中高時代の女性友達（MK）が急いでエレベーターの方に駆け寄ってくる姿が見えた。しかし、すでにエレベーターは上に動き出していて、彼女は少し残念そうな表情を浮かべていた。

目的階に向かうエレベーターがなぜか途中の階で止まった。そしてドアが開き、目に飛び込んできたのは数面のフットサルコートだった。コートの方を見ると、小中学校時代の友人たちが男女仲良くフットサルを楽しんでいた。気がつけば私はエレベーターの外にいて、自分もこれからフットサルをしたいと思ったが、今日は別件があるので、見学だけしようと思った。友人たちは私が加わらないこ

とを珍しがっていた。よくよくコートを見ると、確かにそこはフットサルコートなのだが、コートの上で行われていた競技はハンドボールのようだった。

しばらく友人たちがハンドボールを楽しむ姿を見たところで、夢の場面が変わった。次の夢の場面で覚えているのは、企業人として働くことの辛さを泣きながら話す30歳ぐらいの若い男性の姿が映し出されていたことだ。そして最後の夢の場面においては、どこか小さなオフィスの一階のフロアで、そのオフィスに訪問をして来た男性の年齢を聞き間違えてしまったことである。その男性は37歳とのことだったが、私は57歳と間違えてしまい、向こうもそれを笑っていて、私も大いに笑った。

そう言えばその他にも、大雨の降る近未来型の都市にいて、水溜りを避けながら父と歩いてどこかに向かっていたのを覚えている。その都市に関する場面はもう少しあったように思う。フローニンゲン:2020/5/7(木)07:40

5807. 幼き日に決定しているもの:円環かつ縁環としての人生

そよ風と小鳥たちの鳴き声。そして朝日と自己。それらが今ここにあるべくしてただある。自己はここにあり、世界はここにある。そして同時に、ここにはない自己と世界がここにあり続けている。あるものがそこに在らしめられた瞬間に、そこにはそこにないものが措定される。そこにないものが何かに気づいた時、そこにあるものがわかる。

今日は枕カバーと布団カバーを洗った。先ほど洗濯機が止まり、乾燥機に入れようとしたところ、洗濯機に接続されている蛇口から水が漏れていた。蛇口の下に誰かが洗濯カゴを置いていて、そこに水が溜まっていた。今夜、不動産屋に連絡をしておこうと思う。

幼き頃に決定されていた何か。それについて先ほど考えを巡らせていた。厳密には、ある曲を作り終えた瞬間に、そこに想念が向かった。どうやら人生には、自己と人生の方向性を決定づけるような決定的な瞬間というのがあるようだ。それはとりわけ幼少時代に存在しているような気がしている。まるで雛鳥が目の前にいる存在を目にした瞬間にそれを親だと認識するように、人生におけるそうした決定的な瞬間は、自分の進むべき方向性を決定づける。

確かに私たちは、一生涯を通じて発達する生き物であり、生き方というものを変えていくことができる。つまり、歩む道を変えることはできるのだ。しかし、道そのものは変えることができない。道そのものはすでにそこにあって、そうした道は多分に幼い頃の決定的な瞬間をもって決定づけられているのではないかと思う。そして、その歩む方向性というのも、多分に幼少期の決定的な瞬間において決定づけられているように思える。そう思える幼少時代のエピソードがこの数年間ふとしたときに意識に上がる。

幼少時代に決定づけられているものに対して、悲観する必要も楽観する必要もない。決定づけられているものの上に決定づけられないものが横たわっていて、決定づけられないものの下に決定づけられているものが横たわっているだけなのだから。

絶えず決定と非決定が同居した世界の中を生きているということ。決定済みの道と非決定な道を歩く中で人生が進んでいくこと。重要なことは、そうした道があるという認識であって、そうした道を自分が歩き続けているという認識だろうか。私たちは道がなければ道の上を歩くことができない。そうした道はもう幼少時代の何かしらの体験や決定的な瞬間に決定してして、そこからまだ見ぬ道を作っていく。

白いカモメが朝日を存分に浴びて羽を輝かせながら南下して行った。そちらはアムステルダムがある方角であり、その先にはパリがある。さらにその先にはバルセロナがある。それらの都市はいずれも過去に足を運んだ場所だ。さらに南下するとどうだろうか。さらに南下すると、まだ足を運んだことのないアルジェリアやマリ、そしてガーナなどがある。そこからさらに南下すると、もう南大西洋に行き着く。すると今度は南極に辿り着き、そこからもっと南下すると、なんと今いるフローニンゲンに戻ってくるではないか。南下と北上は同じものだったのだ。そしてどちらも共に、結局は今いる地点に戻ってくる。そう、発達とは、そして人生とは回帰の道なのだ。

還ること。自分は日々この人生を生きながら、どこかに向かって還ろうとしているのだ。だが人間は、一生どこかに帰着することできない。帰還はない。絶えず自分の人生の円環運動の中にいて、円を描きながら日々を生きているのだ。人生はそうした円環であるがゆえに、様々な存在者との縁があるのだろう。どちらも共に巡っているのだ。円環かつ縁環としての人生。そして日々。

なるほど、人生とは最初から無限の円と縁で織りなすものだったのだ。1人の人間の人生が肉体の消滅後も終わりを迎えないのは、多分に縁の存在による。

今私は、思想家にせよ芸術家にせよ、すでにこの世に肉体を持たない人の仕事からいつも励ましを受けているが、彼らの人生は未だに終わっていないのだ。彼らの人生という物語は、彼らの存在を起点にして生まれた縁によってむしろ育まれ続けている。人間は誰しも死ぬが、人生という物語は終わらないというのはそういうことなのだ。フローニンゲン：2020/5/7（木）10:04

5808. 命の流れと命の鼓動：名付けについて

──静かな眼　平和な心　その他に何の宝が世にあろう──三好達治

時刻は午後7時を迎えた。今、フローニンゲン上空に夕日が燦々と輝いている。今日もまた夜空の星々が綺麗に見えることが期待される。夜空を見上げる際には、いつも決まって一際輝く星が目にとまる。昨日もそれをぼんやりと眺めていた。今日もあの星が見えるだろう。それは今夜もまた命を燃焼させる形で光を自分に届けてくれるに違いない。

今から数時間ほど前に街の中心部のオーガニックスーパーに買い物に出かけた。今日もまた天気が良かったので、運河沿いに人々が集まり、日光浴を楽しんでいた。ちょっとした芝生があれば、そこにシートを敷いて寝そべっている人たちの姿も見かけた。家の外に椅子を出して読書をしている人や、談笑を楽しんでいる人たちもいた。

そういえば、こうした光景はあまり日本では見られなかったように思う。アメリカにいた時もそれほど見た記憶はない。こうした光景は、冬の時代が長い地域に固有のものなのかもしれない。いずれにせよ、とても穏やかな春の陽気を感じることができる季節になった。それを大いに喜ぼう。

午前中に、作曲理論書を片手に曲を作っていると、ストラヴィンスキーの曲に遭遇した。その曲の一部が抜粋されていて、その抜粋の中の拍子記号の使い方が独特であることに気づいた。実はストラヴィンスキーはこの曲以外にも、随分と変わった拍子記号を活用し、一曲の中でもころころと拍子を変えたりする傾向があることを前々から気づいていた。ひょっとすると、ストラヴィンスキーは特殊な時間感覚を持っていたのかもしれない。拍子と意識の関係、拍子と身体感覚の関係にも注目しよ

う。旋律は命の流れであり、リズムは命の鼓動である。そうした観点で旋律とリズムの探究を続けていく。

今日は早朝に随分と雑多なことを日記に書き留めていたように思う。それらは全てその時の自分にとって大切なものであった。言葉の形になることを待っているものが疼き出し、それを言葉の形にしていくことを毎日行っている。早朝の日記もその一環であった。

午後にふと、「名人」というのは、ある領域における実績によって名を上げた人のことを言うのではなく、心の中の形なきものに名付けをし、それを何らかの手段によって形にした人のことを言うのではないかとふと思った。

名のある人ではなく、名をつける人間になっていく。この世界で名前をつけられることを待っている存在者たち、すなわち言葉の形になることを待っている幾多の存在者たちに名前という言葉の形を与えること。それを明日からも行っていこう。今夜はまだ時間がある。小鳥たちの鳴き声を聞きながら、そして夕日の光を浴びながら、明日の作曲実践に向けた準備と、絵を少々描いて就寝しよう。今日も静かな充実感に満ちた1日だった。フローニンゲン：2020/5/7（木）19:23

5809. 凡夫の世界からの目覚めを象徴する今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えた。この時間帯になると辺りはもう完全に明るくなっており、朝日が赤レンガの家々に照り始める頃である。起床直後から小鳥たちが鳴き声を上げていて、目が覚めたときには輝く満月を見た。もうこの時間になると満月は消えていて、そこには青空だけがある。

日々目が覚めることに応じて、自己及びこの世界の何かから目覚めている自分がいる。すなわち、日々の物理的な目覚めと精神的な目覚めが足並みを揃えて行われているということである。小さく絶え間ない目覚めのプロセス。それが人間の精神的発達の要諦である。

今朝方は、この目覚めに関する話題と関連するような夢を見ていた。夢の中で私は、以前勤めていた会社に再び務めることになった。その会社は立派なオフィスビルの中にあり、私は久しぶりにスーツ姿になった。オフィスに到着してみると、スリーピースのスーツを着ているのは私だけであり、その

オーダースーツはビジネスマンが着るようなものではなく、デザインが独特であった。そうしたことから、社内で私は目立っていたようである。

オフィスフロアに到着し、自分の席に着くと、隣にはお世話になっていた女性の上司の方が座っていた。その方は出産後しばらくして再び会社に戻ってきたようだった。その方と当時一緒に働いていた時のエピソードを懐かしく話し合っていた。思わず笑ってしまうようなエピソードも多々あり、楽しい時間が続いた。

気がつくと、もう退社の時間が迫っていた。仕事らしい仕事は一切していないが、初日に諸手続きや以前お世話になっていた方々に挨拶をしているとそのような時間になっていた。私は帰る支度を始め、フロアを出ようとすると、もうフロアにはほとんど人がおらず、フロア全体の明かりが消されていた。すると私の近くに、小中高時代の友人が2人（HY & JK）いて、彼らと一緒に帰ることにした。

フロアだけではなく、建物全体が迷路のように複雑な構造になっていて、自分1人ではビルの外に出られないと思ったほどだった。実際に私は、ビルの外に出る道を知らなかったので、2人の友人の力を借りることになった。

無事にオフィスビルを出た時、そこからまた自宅まで帰ることを思うと、少し気分が塞いだ。と言うのも、荷物が意外と重く、それを持って帰ると体が疲れてしまうと思ったからである。そしてふと、今日1日を振り返ってみたときに、会社内では確かに楽しく話すことができた人がいる一方で、気を遣わないといけない人がいることも確かであり、会社に行くことはやはり精神的に疲弊してしまうと思ったのである。

何のために会社に行くのだろうか？自分の心身を疲弊させるためだろうか？それはとても馬鹿げだことである、と私は自問自答していた。何よりも、会社に勤めることになると、自分1人の時間がほとんどなくなり、創作活動に充てることのできる時間などほとんどないことに改めて気づいた。今日から会社に再び勤め始めたが、明日には辞表を出そうと思った。気がつくと私は、飲み屋の中にいた。テーブルにはその他に3人ほど人がいて、会社の同僚と上司だった。私の歓迎会と何かの打ち上げを兼ねての飲み会だった。

不思議なことに食べ物は全く注文せず、飲み物だけ注文し、みんなで話をしていた。しばらく話をすると、上司の方と同僚の1人が葉巻のようなものを取り出した。何やらその葉巻は特別な植物の葉から作られたものらしく、意識を変容させる力があるらしい。私はタバコを含め、葉巻を吸ったことはなく、吸い方が分からなかったので、彼らの様子を見ていることにした。2人は葉巻に火をつけ、プハーと煙を口から吐き出し始めた。2人はそれを吸い慣れているのか、意識は通常と変わらないようだった。だが、副流煙としてその煙を吸っている私の意識に異変が見られ始めた。意識が朦朧とし始め、気がつけば、もう私の意識は完全に変容しており、目を開けていられないほどだった。

すると、スーツ姿の取調官のような人が4人ほど、私たちのテーブルにやってきて、尋問を始めた。葉巻を吸っていた2人はそれをスッとテーブルの下に隠した。彼ら2人は普通の意識で取調官と話をしていたが、私の意識はもう完全にその場になかった。かろうじて目が開いているときに認識したのは、取調官が私を捕まえて、どこかに連行しようとしていることだった。それに何とか気づいた私は、瞬間移動の術を使って、自宅に戻った。自宅に戻り、玄関先で倒れるようにその場に横たわり、やはり明日から会社に行くのは止めようと思った。そこで夢から覚めた。

夢の最後の場面はとても印象に残っている。夢という意識変容の世界の中で、さらに一段深い意識状態に入っていく夢だった。直感的に思うのが、葉巻の香りとそれがもたらす意識変容作用の特性から、あの葉巻の元になっているのは、アフリカに起源がある植物かと思われる。凡夫の世界に戻ったが、そこで再び違和感を感じ、再び凡夫の世界から外に出ようとすることを象徴する夢だった。フローニンゲン：2020/5/8（金）06:42

5810. 今朝方の夢の補足：内的感覚生命

――生命は、時という画布の上に、みずからを描く――鈴木大拙

つい先ほど夕食を摂り終えた。今日も良質な食事を少量ほどいただいた。

今、フローニンゲンの夕方の世界にそよ風が吹いている。今日も1日を通して晴天であり、明日もまた天気が良いようだ。この時間帯になって、ふと今朝方の夢について思い出した。早朝の日記に書き留めていなかった夢の場面として、松の気を触る場面があった。

私は海の上を飛んでおり、眼下に崖が見えたのでそちらの方に近寄ってみると、そこに立派な松がいくつも生えていた。私はそれに触ろうとしたが、私の頭の中に松に触れてはならないという声が聞こえてきた。害虫よけの薬か何かが松の表面に付着している可能性があるらしく、松に安易に触れてはならないとのことだった。しかし私は、目の前の松が安全だという確信があり、眼下の海を眺めながら松林の上からその松に触れた。そして、松の枝に乗り、海に落ちないように松の表面を撫でていた。そのような夢の場面があったことをふと思い出した。改めてその夢の情景を思い出してみると、横山大観が描いた絵のどれかに似たような風景があったように思った。そのような連想が生まれる。

今日もまた創作活動に打ち込む1日であった。何かを捧げるようにして、何かに対して祈るようにして創作活動に打ち込むこと。それを明日からもまた続けていく。

作曲実践と絵画の創作は、自己の浄化をもたらしている。そこには、日記の執筆を通じた言葉の働きとは違う治癒的作用がある。それは決して言葉にはない治癒的作用であり、言葉を使う自己をなだめ、自己の言葉さらには社会によってもたらされた言葉の構築物によって傷いた自分を癒しているかのようだ。人は言葉によって治癒と変容を得られるが、同時に言葉によって傷つきもする。今の私は、そうした傷を言葉以外の手段によって治癒しているようだ。

本日の気づき。その1つとして、内的感覚は生きており、呼吸をしているということに改めて気づいた。内的感覚は固有の命を持っており、また自己の生命から生まれていると考えられるため、内的感覚生命とでも形容できそうだ。そうした生命と音楽を関連づけて考えてみると、メロディーは内的感覚生命の流れ、リズムは内的感覚生命の鼓動、ハーモニーは内的感覚生命の色と対応していることが見えてくる。音楽を構成するそれらの要素についてより探究を進めていこう。自分の内側にある生命現象を絶えず観察し、それを言葉･音･絵の形にしていく。それに有益な学びと実践であれば何でもする。文字通り何でもだ。

明日はどのような1日になるだろうか。きっと素晴らしい1日になるだろう。今日よりもさらに利他的な自己がそこにいて欲しいと思う。そして、今日よりも一歩先に進んだ創作活動ができることを願う。フローニンゲン：2020/5/8（金）19:26

5811. 今朝方の印象的な夢：おどろおどろしい無意識の世界と大学入試

時刻は午前6時を迎えた。穏やかな土曜日の早朝世界が目の前に広がっている。朝日はまだ赤レンガの家々に反射していないが、辺りはすでに明るい。青空を気持ち良さそうに飛ぶ鳥たちの姿が見える。

昨日に引き続き、今日も気温が高く、日中は20度を越すようだ。明後日からは、再び最高気温が10度ほど、最低気温が5度前後の日が続く。

今日はいくつか印象に残る夢を見ていた。夢の中で私は、巨大な洞窟のような地下世界にいた。その世界の中を飛んでいる自分がいて、その世界の中は暗いのだが、目を凝らせば何とか遠くのものが見えた。端的には、その世界はどこかおどろおどろしい感じがあった。飛行中の高度調整が難しく、一度地下世界の底まで沈み込んでしまう瞬間があり、底には無数の骸骨やしかばねが転がっていた。そうしたおどろおどろしいものがその世界の底に転がっている一方で、その洞窟のような世界を取り囲む壁には壁画や宗教画が描かれていた。それらはどれも尋常ではないほどの大きさであった。

そのような場面があったのを覚えている。起床後、この夢について振り返っていると、それは自分の無意識、ひいては人間の無意識全般の姿なのかもしれないと思った。私たちの無意識の奥底には、おどろおどろしいものが存在していて、それと同時に、文化的なものや宗教的な何かが横たわっているのだと思ったのである。最初の夢は、私に大きな印象を与えた。

次の夢の場面では、私は大学の図書館にいた。雰囲気からすると、日本で卒業した大学の図書館のようだった。実際の大学図書館にはないが、夢の中のその図書館の1階は書店になっていて、そこで書籍を吟味していると、小中学校時代の女性友達（KK）に出会った。彼女の他にも2人ほど女性がいたが、よく顔を確認することができなかった。本を選んでいる私に彼女は声をかけてきた。どうやら彼女は、大学の4年生の時にインターンをすることを考えているらしかった。しかし、あと少し大学に通って単位を取る必要があるようであり、インターンの勤務時間と授業が重なりそうであり、その点を懸念していた。インターンも学業も中途半端になってしまい、果ては大学を卒業できないことになってしまうのではなないかということを心配しているようだった。

彼女に対して私は、インターンはあまり勧められないと伝えた。大学に在学中はとにかく大学の勉強、あるいは自分が探究したいことを勉強していく方が望ましいのではないかと伝えた。それに加えて、そもそもインターンで行えることや垣間見えることなど微々たるものであり、それは社会に出たら否が応でも学ぶことであると伝えた。端的には、インターンはちょっとしたスタートダッシュにすぎず、しかもそのスタートダッシュは微々たるものであり、どうせ社会に出たら同じようなところから始まるのだから、特権として与えられている学生時代をそのようなことに使うのはもったいないと伝えたのである。

すると、私たちの横に、高校時代にお世話になっていた小柄な女性の先生が立っていた。先生は微笑みながら私たちの話を聞いており、先生の表情から先生が言わんとすることが察せられ、私は友人の彼女に対して少しばかり強く自分の考えを述べすぎたように思われた。そのため、話の最後に、「これは自分の考えだけど」と付け加えたところで彼女と別れた。そこからまた私は、書籍の吟味を書店で行い始めた。

次の夢の場面では、私は旅館の畳部屋にいた。そこはどうやら大学入試の会場のようだった。私の手元には、東京大学の数学の入試問題が4題ほどあった。試験時間は十分なものであり、比較的余裕を持って解けるのではないかと思った。いざ問題に取り組んでみると、私の左隣に若い女性がいて、彼女も入試を受けているようだった。その他にもあと2人ほど人がいて、どうやら私たちは4人で協力して問題を解いているようだった。さらにこの試験が変わっているのは、持ち込みが可能であることだった。実際のところは、事前に入試問題が知らされており、その解答を準備してきて良い形になっていた。

隣の女性は第2問に苦戦しているようであり、彼女は解法アプローチとして場合の数の考え方とネットワーク理論を活用しているようだった。特に後者の理論は応用数学の分野のため、そうした考え方を入試問題に適用する必要はないと思われた。そこで私は、自分の解法を彼女に共有した。そちらの方がシンプルにかつ正確に問題が解けると思ったからである。

気がつくと、残り2人の男性はもうその場にいなかった。彼女も残りの問題については最後まで解答する必要がないと思ったらしく、その場を後にしようとしていた。彼女の目論見としては、部分点狙いで、2問完答プラスアルファで十分に合格するとのことであった。その場に1人残った私は、引き

続き全ての問題を最後まで解こうとした。どうしても答えまで辿り着けない問題があり、私は3問完答プラスアルファほどになった。

すると、今度は私の目の前に、一橋大学の数学の問題が5題ほど現れた。先ほどの東大の問題は、基礎的な事柄を尋ねるよく練られた良問が揃っているように思えた。基礎が本当にわかっていたら、初手も速やかに思いつき、問題を解き切ることはそれほど難しくないと思われた。一方の一橋大学の問題は、取っ掛かりが非常に難しいものが多く、初手を選ぶのに苦戦している自分がいた。問題選択に関しても、微積分が絡む得意の関数の問題から始めるのか、それとも力技で数え上げていくことが可能な場合が多い確率の問題から着手するのか、そのあたりも悩んでいた。

先ほどの東大の問題は、幾分誘導が付いており、親切に思えた。一方で、一橋の問題は、誘導が一切なく、一見すると不親切のように思えたが、むしろ問題の簡潔さが美しく思えた。それはどこか禅的な美しさがあった。いずれにせよ、どちらの大学も、とりわけ文系であれば数学の出来が合否を分けると言っても過言ではないので、私は最後まで粘って問題を解き続けていた。そこで夢の場面が変わった。

この夢のように、私は時々大学受験に関する夢を見ることがある。そして今でもふとしたときに、大学の入試問題を見て、それを解くことがある。興味深いことに、当時は難しく感じられていた英語や国語の問題がとても簡単に思える自分がいる一方で、世界史の論述に関しては知識が抜け落ちているためにとても難しく感じられ、数学についても最後まで答えを出せるようなものがほとんどなくなっていることに気づく。先日も、2020年の難関大学の数学に関してはほぼ全ての問題に目を通した。するとやはり、解法は思いつくものが多いのだが、計算力が落ちているのか、最後まで答えに辿り着けなさそうな問題が多かった。

このように毎年入試問題を見ていると、日本の大学が求める人材要件は今も昔も対して変わっていないことが窺われ、アメリカと同様に、凡夫の世界に執着するためのゲームが相変わらず行われていることに気づく。入試問題の解法がいくら思い付こうが、自己を凡夫の世界から解放させなければ全く意味がないのにと思ってしまう。こうした仕組みが依然として存在しているがゆえに、その仕組みによって調教された知性しか持たないエリートが世界を蝕むという現象が生まれているのだろう。フローニンゲン：2020/5/9（土）06:43

5812. 今朝方の夢の続き

時刻はゆっくりと午前7時に向かっている。この落ち着き。そして平穏さ。フローニンゲンの街を形容するにはそれらの言葉がふさわしい。また今の季節は本当に過ごしやすい。先日にひょんなことから、昨年の夏の時期に行われていたオンラインゼミナールの音声ファイルをいくつか改めて聞いていた。

すると、8月の半ばに録音したものがあり、そこで私はフローニンゲンの気温について言及しており、8月半ばでも気温が20度前半の日があるとのことであり、大変過ごしやすいと述べていた。確かに、夏は数日ほどものすごく暑い日があるのだが、そうであったとしてもオランダの一般家庭にはクーラーなどなく、カーテンを閉めて窓を開けていれば何とかなってしまう。今年もそうした夏がやってくるだろう。

フローニンゲンでの生活も気がつけば5年目に入る。毎年夏の感じ方、そして夏から学ばされることは異なり、それを見ていると、自分自身が絶えず変化しているのだと気づく。自分自身が変化を続けていれば、気づくことや学ぶことは必然的に変わってくるのである。長い冬を通り抜けた新たな自分は、きっとこの夏をまた新鮮な気持ちと在り方で過ごすことになるだろう。

絶え間なく変化する自己と、絶えず新鮮な気持ちで過ごす日々。自分の人生はそのような形で緩やかに進行していく。気がつけば朝日が昇っていたように、気がつけば満月が消えていたように。

今朝方の夢について先ほど振り返っていた。随分と多くのことを書き留めていたように思うが、夢にはまだ続きがある。それらについても書き留めておきたい。そしてそこから、夜の9時半まで創作活動に励んでいく。仮に実際に手を動かして創作物を作っていなかったとしても、その他の時間も絶えず創作に関することを考えているように思えるため、トータルすれば、やはり毎日15時間ほどは創作活動に従事していると言えるかもしれない。それでいて全く疲れることはなく、むしろ自分が活き活きしてくるのがわかる。

自己というのは創造的な生き物であり、本質的に絶え間ない産出活動に従事しているのだから、内側で形になることを待っているものを形にしていくことで自己の存在基底が喜びに震えるというのは当然のことかもしれない。

そうであった。夢の続きを振り返ろうとしているのであった。

聞こえてくる小鳥たちの鳴き声によって瞑想的な意識状態になる。その状態の中で夢を振り返っていこう。いや、その前に今一口飲んだ大麦若葉の味について書き留めておこう。これは街の中心部のオーガニックスーパーで売られているものである。瓶詰めにされているこの大麦若葉を先日に切らしたので、数日前にそれを購入した。すると、以前と全く同じ商品なのだが、味がより香ばしくなっていることに気づいたのである。より深い味わいになっており、それは好ましい変化だった。

私は普段、有機栽培かバイオダイナミクス農法で作られたものしか摂取しないのだが、それらの栽培方法で作られているものは味や栄養の観点から素晴らしいだけではなく、日によって大きさや形などが変わることも面白いと思っている。バナナ、リンゴ、トマト、ジャガイモ、サツマイモなどは毎回表情が違う。季節によって大きさが随分異なることもある。冬には肥大したリンゴやトマトを見ることも多く、それらを見るたびに、ノルウェーのベルゲンのホテルで偶然見たディスカバリーチャンネルの北極特集が思い出され、寒さの厳しい地域で育てられた生物のたくましさを思う。

果たして自分は北欧に近いこの場所で4年間生活することを通じてたくましくなったのだろうかと考える。自己という存在を編む糸がより密なものになったことは間違い無いだろう。以前よりも糸が張り詰められ、その強度も増し、それでいて全体としての織物には柔らかさがある。そのようなイメージが思い浮かぶ。

何の話をしていたかというと、大麦若葉の味である。そう、それは以前のものよりも香ばしくなっていて、味が変わっていたのだ。こうした微細な変化に気づけることの大切さを昨日も考えていた。就寝時間を15分早めてその変化に気づけないような鈍感な内的感覚はいかほどかと考えていた。その他にも、生活上、実践上、学習上の諸変数を特定し、変数の種類･量･質を変化させたことによっていかような変化が生み出されたのかに気づけないほどの鈍感な感覚ではダメだと改めて思ったのである。そのようなことを昨夜考えていた。そこからの夢である。

夢の続き。夢の中で私は、ある知人の方と食事の約束をしていた。場所は東京の都心部であり、待ち合わせ場所の店はオフィス街ではなく、雰囲気の良い下町にあった。待ち合わせ時間は午後8

時半と少々遅いが、そこは初めていく場所だったので迷ってはいけないと思い、早めに到着するようにした。すると、8時15分に店に到着することができた。

すると、知人の方はもうその場にいて、挨拶をすると、どうも機嫌が悪そうだった。するとその方は、怒りを押し殺した表情の中、口を開いた。

知人:「加藤さんは待ち合わせがある時にはいつもこれくらいの時間に来られるのですか？」

私:「早すぎましたか？すいません」

知人:「いえ、8時半に約束したのだから、30分前の8時に来るのが常識でしょう」

知人はそのように述べた。私はてっきり早く来すぎたことをその方は怒っているのかと思ったら、むしろ逆のようだった。5分前集合ならまだしも、30分前集合など聞いたことがなく、随分と理不尽な怒りをぶつけられたものだと思った。その方は依然として不機嫌そうであり、そのような状態で一緒に飯を食べても飯が不味くなるだけだと思い、私は嫌気がさして、今日の食事を丁重にお断りしてその場を後にした。

次の夢の場面は、そこから続いているものだった。私は東京駅近辺にいて、空を飛んでいた。ある会社に行って講演会かセミナーをする予定になっているようであり、その場所に向かおうとしていた。すると気づけば自分はある大学にいた。それは母校のような雰囲気を持っている。緑豊かな場所に校舎があって、校舎の裏の通りを歩いていた。

すると、現在協働中のある方が現れ、その方と一緒にこれから大学で講演をすることになっていることを知った。大学の裏道をその方と歩いていると、後ろから誰かの独り言が聞こえた。振り返ると、そこには台湾人の中年の男性教授がいた。その教授は手元のカメラをいじりながら英語でぶつくさと何かを述べていた。「どうかしたのですか？」と私は英語で話しかけたところ、その教授はにっこりと笑みを浮かべ、ちょっとカメラの調子がおかしいと述べた。するとすぐに調子が戻ったようであり、試しに目の前の公園で遊んでいる子供たちを写真に撮ってみようとその教授が述べた。どうやらうまく撮れたようであり、カメラが元に戻ってその教授はさらにご機嫌のようだった。

するとその教授は、懐かしさを醸し出す日本の童歌を口ずさみ始めた。私も協働者の知人も、それはどこかで聞いたことのある歌であり、懐かしく感じていた。どうやらその教授は、母か祖母が日本人らしく、日本のルーツがあるようだった。教授が童歌を口ずさむのを聞きながら、大学の講堂内に入り、エスカレーターに乗った。その時に、私もその歌を口ずさみ、なんとかその曲の名前を思い出そうとするもなかなかそれができなかった。知人の方も同じことをしてみるものの、曲の名前を思い出すことが難しかった。

すると、エスカレーターの後ろに立っていたその台湾人の教授が続きの箇所を全て歌い上げ、私たちは歌詞すらもおぼつかなかったので、彼のその記憶力に感服した。エスカレーターを降りると、台湾人の教授も知人もいなくなっていた。見ると、そこはレストラン街であった。

ちょうど昼食時であり、講演までまだ時間があったので、どこかレストランにでも入るかと思った。新鮮な野菜や魚で有名なバイキング形式のレストランが目に入ったので、そこに入ると、大学時代のゼミの友人（TA）と偶然出会った。私は水だけ注文し、彼はかなりいろいろなものを取っていた。レジの店員はペットボトルの水のバーコードをスキャンすると、ちょっと待っていてくださいと述べてどこかに行ってしまった。

彼を待つ間に、友人と話を始めた。自分が肉を食べることをやめてしばらく経つということを伝えると、彼はどこか不思議そうな表情を浮かべていた。あるいは、それは信じられないというような表情を浮かべていた。肉を食べないことによって、心身が浄化され、自分のエネルギーが溢れかえっていることを彼に伝えると、彼はいきなり恐怖について話をし始めた。人間は恐怖を感じるから生きていけるのだというような話だった。それに対して私は、恐怖というのは自分の認識が生み出す産物であって、それによって自己を制限してしまうのはどうかと述べた。そのような主張をすると、彼はだんまりしてしまった。

そのような会話をしていても、店員はまだレジに帰ってこなかった。もう支払いを済ませたのになぜ待つ必要があるのかと疑問に思っていたところ、別の店員がレジにやってきて、さらに安い水が近くの店にあり、それを取りに行ってくれているとのことだった。もうしばらくレジで待っていると、静かに夢から覚めた。フローニンゲン：2020/5/9（土）07:36

5813. 悪行の導引と人間社会

時刻は午後7時を迎えた。つい今し方夕食を摂り終えた。穏やかな夕日の光がフローニンゲンの街に降り注いでいる。土曜日が静かに始まり、そしてこのように静かに終わりに近づいていく。

今日は午後に、久しぶりに映画を見た。少しばかり古いが、『マイノリティ・リポート』という映画を見た。この作品から考えさせられることは多く、高度に発達した技術の活用とそのジレンマに関する論点について特に考えさせられることがあった。それは人間の発達を商品化する問題や、発達測定を社会的に活用することに関する問題も提起している。それらについては追々文章を書き留めておこうと思う。

それらの論点以外にも、人間はつくづく絶えずバグを内側に抱え、そしてバグを絶えず生み出す存在なのだということについても考えていた。人間の中に潜むバグを全て取り除くことはできない。仮にそれが一時的にできたとしても、再び自然発生的にバグが生じる。それは心の中の隙のようなものであり、それと人間が根源的に持つ欲求や心の闇と相まって、人は過ちを犯す可能性を絶えず内包している。いかなる人間も魔が刺しうるということ。心の中には魔が常に存在しているのだ。

自分の中に悪魔がいるということを認識しているということは、暴走を防ぐ最低限の手段になりうるが、人は本当にいとも簡単に暴走するような生き物だと思っておいた方がいいように思う。そのような現象は後を絶たず、自分に引き付けてそうした現象を考えてみた時に、果たしてどれくらいの人が魔が刺さないと言えるだろうか。おそらくそのようなことを言える人はゼロであろう。仮にそのようなことが言える人がいたとしても、魔が刺さない人間などゼロであろう。

私たちは心の中に、そして社会の中に絶えずバグを生み出し続ける性質を持っている。そうしたバグは悪の通り道となる。それは悪行の導引となり、それが消え去ることは決してない。人間の中にはもちろん善性が存在しており、善行をなすことができるのは否定できない。だが私たち人間社会は皮肉なことに、諸々の複雑な技術を発達させすぎてしまい、ひとたび悪が暴走し始めるともはや手がつけられないものになっている。

人間社会の運命はどうなってしまうのだろうか。それについてこのところ考えてみることが多くなった。考えざるを得ない何かが自分の中にあるようなのだ。明日もまたこの問題に考えを巡らせるかもしれない。フローニンゲン:2020/5/9(土)19:27

5814. 月での生活: 意識の拡張と意識の超出をもたらす美的体験

時刻は間も無く午前6時を迎える。辺りはすっかり明るくなり、たくさんの小鳥たちが鳴き声を上げている。今朝方の彼らの鳴き声は、いつも以上に澄み渡っているように聞こえ、瞑想的な意識にしてくれる。遠くの空は薄ピンク色をつけていて、上空にはまだ満月が見える。もう30分前であれば、満月がもっとはっきりと見えていた。

ふと、月での生活においては、こうした小鳥たちの鳴き声が聞こえないのだなと思った。もちろん、音源として小鳥たちの鳴き声を聞くことはいくらでもできるが、彼らの生の鳴き声を聞くことは難しい。今こうして彼らの鳴き声に包まれていることの有り難さが身に染みてくる。

月での生活に少しばかり思いを馳せていた。仮に月で生活をすることになったとしても、おそらく今と行っていることは変わらないだろう。自分のライフワークを月でも続け、今と同じような生活を営んでいくに違いない。言葉·音·絵による創作活動。月の上でもそれに従事し続けていく自分の姿が想像できた。

月の上で生活をし、月から地球を眺めている自分。そして地球について思いを巡らせている自分を想像した。そこで浮かんできた考えは、地球という巨大な命の延命を単にしているだけではならないというものだった。地球が健全な形で生き続けることを支え、その中で自らの生を営んでいくことの重要さを思った。

仮に地球の外で生活できるようになったとしても、地球という命を見捨ててはならないように思う。そこで暮らす多様な生物を考えると、そのようなことを思う。今自分の耳に届けられる小鳥たちの鳴き声。その美しさを思うと、なおさら彼らを見捨てることはできない。

先ほどヨガの実践をしている最中には、ビジョンが生起する意識状態になり、目をつぶるとそこに多種多様なイメージが現れ、その中に、地球からどんどんと意識が離れ、月に向かっていくイメージがあった。外に立つこと。それについて先日言及していたように思う。意識の発達とは、意識が内側に向かい、認識が深まっていくプロセスであるのと同時に、意識は既存の認識の枠組みを超出していくというプロセスでもある。その時に、外に立つということが鍵を握る。

エクスタシス(ecstasis)、それは恍惚的な体験であるのと同時に、語源としては超出することを意味する。芸術による美的体験は、自己を超越させるもの、つまり自己を既存の認識の枠組みの外に立たせる体験なのだ。芸術を通じた美的体験は、自己を外に連れ出してくれる役割を果たしうる。それは、意識の拡張と意識の超出をもたらしてくれる。そうした体験を日々積んでいる自分。日々は、意識の拡張と超出の連続的な過程として進行している。今日もそのような1日になるだろう。

今日もまた創作活動に打ち込んでいきたい。おそらく今日の午前中をもってして、ウォルター･ピストンの600ページほどにわたる理論書の1周目が終わる。掲載されている譜例を1つ1つ写譜し、そこからさらに自分なりの工夫を凝らして曲を作るということをしていたので時間は掛かったが、大いに実りある実践であった。1周した後にすぐさま2周目に入るのではなく、他の理論書を用いて同じことをしていこうと思う。同じようなことをしたい理論書は、今手元に15冊ほどある。その中でも今日からは、“Contemporary Harmony”を参照したいと思う。その次に、アーノルド･ショーンバーグが執筆した初期の理論書を参照していく計画だ。昨日イギリスから届いた書籍を参考にし始めるのはもう少し後になるだろう。フローニンゲン:2020/5/10(日)06:15

5815. 地球の命と遠い未来の生命体

時刻は午前6時を回った。朝日が赤レンガの家々に照り始めている。辺りはすっかりと明るくなり、満月はもうかすかにしか見えない。輝く満月を眺めることができるというのは、早起きの特権なのだということを改めて思う。日中は、日光浴をしながら太陽から直接エネルギーをもらっているのだが、早朝に月が見える日には、太陽の光が月に反射したエネルギーも享受させてもらっている。月に反射することによって、それは太陽と月の双方のエネルギーが融合したものになっているように感じられる。

昨日は、悲観論では決してなく、地球というのが1つの生命であるのなら、やはり最後は死が待っていることについて考えていた。太陽ですら寿命があり、何十億年かそれよりも先かわからないが、太陽ですら死滅するらしい。そう考えると、地球が今後も永遠に生き続けると考えることはできないように思う。生命は死があってこその生命である。死がなければ生はない。

地球の寿命を早めるような愚行を行っているのが現代人及び現代社会であり、そうした愚行をやめ、地球が本来の寿命をまっとうできるように、地球と寄り添いながら生きていくことが求められる時代にますますなってきている。その際に重要なことは、個人としては凡夫からの脱却であり、社会としては凡夫を大量生産し、凡夫によって回る仕組みから脱却していくことだろうか。

地球が命を終えた後の世界、ないしは宇宙について考えていた。仮に人間という生命が地球外で生活を始めたとしても、もっと優秀な知的生命体が生まれてくるように思えた。以前から再三述べているように、人間は欠陥だらけの生き物である。身体としても心としても実に欠陥の多い生き物だ。心の欠陥に関しては昨日の日記の中で言及していたように思う。端的には、心には絶えず隙があり、心の闇があり、そこから様々な欠陥ないしはバグが思考空間に生まれる。だから人間はそうした欠陥まじりの思考から馬鹿な意思決定と愚行を犯すのだ。

身体的な欠陥についてもこれまで何度も言及していたように思う。そもそも他の生き物を貪り食らう形で生きていかざるを得ない身体を人間は持っており、しかもその消化に膨大なエネルギーを使っているという実に非効率的な身体を持っている。

昨日ぼんやりと考えていたのは、人間の後に生まれてくる知的生命体は、そうした欠陥を乗り越えて、身体上においては、太陽の光だけで生きていけるようになるのではないかと思った。水と空気がある惑星は限られるであろうから、太陽の光だけで生きていける生命について考えを巡らせていた。だがそこから、太陽の光で生きていくことも不都合があるように思えた。なぜならそれは、太陽の光が届く場所でしか生きていけないことを意味しているし、太陽が消滅した後に生きていくことができなくなってしまうからだ。そうなってくると、もう想像がつかないほど先に誕生する究極的な生命体は、宇宙に偏満するダークマターだけを摂取して生命活動を維持できるようになってくるのではないかと思えた。そのようなことを考えながら昨夜は就寝に向かった。フローニンゲン：2020/5/10（日）06:33

5816. 今朝方の夢

時刻は午前6時半を迎えた。つい先ほどまで見えていた満月が消えた。改めて、早朝未明に満月を眺めることができたことを嬉しく思う。満月を眺めることができるというのも仮そめのことだったのだとわかる。

今日もまた創作活動に励むことを通じて、自己を超えていこうと思う。今朝方にふと、自分が望むものを望む形で生み出していく創作活動に従事することは、学校教育によって調教された心を解放させることにつながっていると思えた。発達心理学者のハワード･ガードナーの言葉を用いれば、「脱学校化された心」を獲得する営みとしての意味も創作活動にはあるように思えた。しかし、そもそも心が学校化、つまり調教されるようなことがなければ、そうした概念は生まれ得ないことを考えてみると、つくづく学校システムに対しては疑問の目を投げかけざるを得ない。そのようなことを先ほど考えていた。

それでは、今朝方の夢について振り返りをしたら、絵を少々描き、そこから早朝の作曲実践に取り掛かっていく。今日も昨日に引き続き、充実した創作活動が実現されるだろう。それがもう事前にわかっていること。重要なことはそれだ。もう自分は知っているのである。前もって知っていること。自分にとって重要なことはもう前もってわかっているのだ。あとはそれが現実世界で形となって現れてくるように行動するだけである。

形なきものは常に形に先行して存在している。自分はそれをいつも察知している。ここのところはその察知力がより鋭敏になってきている。言葉の形にならないものであったとしても、多くのことを自分は前もって察知しているようだ。

今朝方の夢。夢の中で私は、実際に通っていた中学校の体育館にいた。いや、その体育館よりも綺麗な印象を受けたので、別の体育館かもしれない。いずれにせよ、そこで私は、親友（HS）と他校の2人とバスケの2on2をしていた。親友と私は同じチームであり、他校の2人が相手だった。そのうちの1人は、少し離れた街の学校のエースであり、もう1人は近くの他の学校の後輩であり、彼もまたバスケが上手かった。

私たちは、1ゴール1点の換算で、20点先取のゲームをしていた。ちょうど10対10の点数になったところで、2人の警察官が体育館のドアから顔を覗かせた。20点先取のゲームは思いのほか時間がかかるため、ちょうどそこで私たちは小休憩に入った。私たちは警察官たちの方に歩み寄り、話を聞いてみると、何やら近くのスポーツショップでウェアが盗まれたとのことだった。警察官たちは、私たちのことをそれほど疑っているようではなかったが、念のため、私たちのウェアを確認させて欲しいと述べた。私は自分のウェアを1人の警察官に渡した。

すると、その警察官が、どうしてウェアに名前を入れていないのか、と尋ねてきたので、そのウェアは名前を入れる必要のあるものではない、と私は答えた。2人の警察官たちは納得したような表情を見せて、体育館を後にした。体育館に残った私たちは、そこからゲームを再開しようと思ったが、警察官たちと話をすることによって、随分と時間が経ってしまい、体育館の時計を見ると、昼時に迫っていた。そこで一旦昼食休憩を挟もうということになった。

私はあまりお腹が空いていなかったが、他校の後輩が意気揚々として昼食を買いに行ってくれると述べた。彼はどうやら寿司弁当が食べたいようであり、私も同じものをお願いした。そこで彼に自分のクレジットカードを渡そうと思ったが、後から現金を渡す方がいいだろうと思った。そこで夢の場面が変わった。そこからはまた別の夢を見ていた。3人の親友と彼らの奥さんが現れる夢だったことを覚えている。フローニンゲン:2020/5/10(日)06:51

5817. 絶えず破滅の縁に立ち続ける人間と人間社会

時刻は午後7時半を迎えようとしている。日曜日がゆっくりと終わりに向かっている。

今日は午前中の途中から空に薄い雲が覆い始め、今も空は雲に覆われている。この分だと今日は夕日が沈む姿を眺めることができず、夜空の星を眺めることは難しそうだ。それらの光景を拝むのは明日以降になるだろう。

本日、バッハのコラール全440曲を参考にし終えた。楽譜に記録されている日付が、一番最初に範を求めた日から今日まで約2年間の時が過ぎたことを伝えている。ほぼ毎日バッハのコラールを参考にして曲を作り、ようやく1巡を終えたことを少しばかり感慨深く思った。いつも1冊の楽譜を参考

にし終えた時には、過去にそうした曲を残してくれた作曲家への感謝の念と、自分が一歩前に歩みを進めた感覚の双方がある。先ほどもそうした感情と感覚を味わっていた。

本日をもって全てのコラールを参考にしたが、今後も4声のコラールを作っていきたい。バッハのコラールを基にした新たな原型モデルを作ることはしばらくしないが、これまで作った原型モデルを活用してコラールを引き続き作っていく。4声のコラールは、とりわけハーモニーの観点から様々な実験ができるため、今後もコラール形式の曲を作ることを通じて作曲技術を磨いていこう。

今日もまた雑多なことを考えていた。1つには、私たち人間存在と人間社会は、常にカオスの縁に立っており、絶えず破滅と隣り合わせにあるのではないかというものである。この社会に山積みとなっている問題の複雑性を考えると、いずれも残念ながら根本的な解決案などないように思える。仮にある特定の問題が根本から解決したとしても、問題というのは問いと同様の性質をもっていて、1つの問題が解決されると、その問題は新たな問題を生み出す。しかもそれは、以前の問題よりもさらに複雑な形となって提示されるのだ。まさに私たち人間が、固有の発達課題を乗り越えて発達し、以前よりもさらに過酷な課題を突きつけられるのと同じである。

問題は問題を呼ぶ。あるいは、問題に対する解決策は、解決策を提示するだけではなくて、なんと新たな問題まで提示するのである。この世で完全なる真空を作ることができないのと同じように、この社会に山積みの問題を完全に解決することはできないようだ。しかしだからと言って、破滅の道を歩むことしか私たちに残されていないかというとそうではない。

私たちは、破滅に至るギリギリの縁に立ち続けることができる。おそらくできることはそれしかないのではないかと思う。破滅に至らしめる要因を完全に取り除くことはできないが、破滅の一歩前に絶えず立ち続けることだけが人間と社会にできることなのかもしれない。そして一歩間違えば、そこには破滅が待っている。どうも人間はそれを宿命に背負って生きているようなのだ。そうした考えの元になっているのは、今から8年ほど前にサンフランシスコの坂道を歩いていた時の気づきだった。人は絶えず狂人に至る縁の前に佇んでいるという気づき。そんな気づきが突如降ってきたことを思い出す。

人間は問題を新たに生み出しながら、今よりもさらに過酷な問題と対峙することを宿命づけられている。それと対峙することをやめた時、それは破滅の側に足を踏み出してしまったことを意味するのだろう。その一歩を踏み出さないために、破滅の縁に佇み続けること。そして絶えず課題と向き合っていくこと。人間と人間社会は、いつもそれを宿命として抱えながら存在している。フローニンゲン：2020/5/10（日）19:43

5818. 今週末に注文予定の書籍

時刻は午前6時半を迎えようとしている。今朝は昨日よりも風が強く、新緑の木々が踊りを踊るかのように揺れている。気温に関しても肌寒く、今日の最高気温は11度、最低気温は2度とのことである。少し前までは初夏を感じさせる暖かさの日もあったのだが、今はまた肌寒い日々に逆戻りしている。行きつ戻りつをしながら進んでいく季節。自分の人生もそれと同様に進んでいくのだろう。

今朝方も夢を見ていたのだが、珍しくその内容をほとんど覚えていない。夢の最後の場面が終わった時に目覚め、目覚めた瞬間に、夢の感覚だけが残っていて、映像的な記憶はもうなかったように思う。かろうじて覚えていることがあるとすれば、見知らぬ日本人の男性が夢の中に登場していたことと、高校時代の友人（HH）が登場していたことぐらいだろうか。後者に関して言えば、友人の彼が英語の筆記体でサインか何かを書き、それを誰かが褒めていた光景を覚えている。

今日から新たな週が始まった。気がつけば、5月も今週末で折り返しになる。今週末にはまた書籍でも注文しようと思う。先月に書籍を注文した際に、アメリカのアマゾンはコロナの影響で欧州に向けた商品の発送を止めていたが、昨日確認したところ、物流が復活したようだった。そうしたことから、前々から注目していた作曲理論書を購入しようと思う。

ここ最近はハーモニーに関する書籍を随分と購入し、それらに掲載されている譜例を参考にして学習と実践をする日が続いている。今週末に注文する予定のその書籍は、一般的なハーモニーの書籍では取り上げないような作曲家の曲が譜例として豊富に掲載されており、非典型的なハーモニーを学ぶことができる。以前より注目をしていたヨーゼフ･マティアス･ハウアーなどの作品も譜例として取り上げられていることが購入の決め手になった。今週末にはその他にも、インド音楽に関する

書籍、夢分析の辞書的な専門書、フランシス･プーランクの楽譜、そして組織行動･集団行動と精神分析に関する専門書を購入する予定だ。

今日は午後に1件ほど協働プロジェクト関係のオンラインミーティングがある。それ以外の時間に関しては、いつもと同様に創作活動に充てようと思う。絵画の創作に関しては、朝昼晩の3回に分けて、それぞれ4枚ぐらいの絵を描くことが今の自分にとってはちょうど良いようだ。色と形を用いて内的感覚を絵にしていくことは、作曲にはない治癒と変容作用があることを実感する。今日も作曲と絵画の創作の双方に存分に打ち込んでいこう。フローニンゲン：2020/5/11（月）06:40

5819. 贈り物を授けてくれた恩師、元ハーバード大学教育大学院教授カート･フィッシャー氏の追悼

時刻は午後7時を迎えた。つい先ほど夕食を摂り終え、1日の振り返りとしてこの日記を書いている。

今日は午後まで空に雲が覆っており、朝には少しばかり小雨が降っていた。幸いにも午後には晴れ間が顔を覗かせたので買い物に出かけたものの、とても肌寒かった。ここ最近は日中に買い物に行く際には、半袖半ズボンの姿で軽くジョギングしながらスーパーに向かうようにしている。できるだけ日光を体に当てるための工夫である。

買い物に出かける時には太陽が燦々と照っていたのでいつもと同じような格好で出かけたところ、自宅の外に出てみて思いの外寒いことに驚いた。すれ違う人たちはみんなジャンバーやジャケットを羽織っていて、私のような格好をしている人はいなかった。帰りに運河の前を通ったところ、そこにあるベンチに腰掛けていた中年男性が私の方を見て笑みを浮かべた。私がその人の方に向かって歩いていくと、その男性は「そんな格好で寒くないのか？」と笑いながら述べた。それに対して私は、「寒いですね。格好を間違えました」と笑いながら述べた。そんなやり取りがその場で交わされた。

夕方の今は風が少し出ていて、夕日に照らされた新緑を揺らしている。

今日は午前中に、1つ残念な知らせを聞いた。私をオランダ、そしてフローニンゲン大学に導いてくれた恩師である元ハーバード大学教育大学院教授のカート･フィッシャー氏がお亡くなりになれたという知らせだった。今年の3月30日に76歳でこの世を去られたという知らせだった。その知らせを聞

いた時、にわかにそれを信じることができず、今から数年前に父方の祖父が亡くなった時と同じような気持ちになった。

フィッシャー教授がハーバード大学を退官される前年にフィッシャー教授の研究室を訪問し、フィッシャー教授とお話をさせていただく機会があった。その時の私はまだニューヨークで生活をしていて、ボストンまでは電車で行ける距離だった。

当時はマサチューセッツ州の研究機関のレクティカで働いていることもあり、そして何よりフィッシャー教授のダイナミックスキル理論を真剣に探究している時であったから、実際にフィッシャー教授とお会いできたことを本当に嬉しく思ったことを覚えている。それはもう今から7年前の2013年のことである。その時は、私は日本のある大学の研究者の方に通訳を依頼されてフィッシャー教授と面会したのだが、その後フィッシャー教授とメールのやり取りをさせていただき、フィッシャー教授から有り難いことに、「うちに来て研究をしないか？」と声をかけていただいた。その時にはレクティカでの仕事もあり、また別の仕事も掛け持ちしていたので、その有り難い申し出を泣く泣く断ることになった。

だが翌年、レクティカを去り、他の仕事もひと段落ついたので、ハーバードにいるフィッシャー教授の下で研究をしたいと思って再度連絡をしたところ、フィッシャー教授から、今年でもう引退するということを聞いた。フィッシャー教授と直接お会いした時にも思ったが、フィッシャー教授は本当に親切な方であり、残念ながらハーバードで一緒に研究をすることはできないが、その代わりに自分の長年の協働研究者を紹介するとおっしゃった。そこで紹介していただいたのが、フローニンゲン大学のポール･ヴァン･ギアート教授だった。

フィッシャー教授に紹介をしていただく前から、ヴァン･ギアート教授の仕事については知っており、2人の共著論文を食い入るように全て読んでいた。また、ヴァン･ギアート教授の主著である"Dynamic Systems of Development: Change between Complexity and Chaos (1994)"に大きな感銘を受けていたことを覚えている。この書籍の中に、フィッシャー教授がオランダのヴァン･ギアート教授の自宅を訪問した際の大変微笑ましいエピソードが記述されており、それを見て2人の関係性の深さと2人の人柄を改めて知った。

フィッシャー教授からヴァン･ギアート教授を紹介していただけなかったら、私は決してオランダに来ていなかったであろうし、今このようにフローニンゲンで生活をすることなどなかったであろう。それを思うと、フィッシャー教授が私にもたらしてくれたことへの感謝の念が尽きない。私の人生にとって、ここでの生活は贈り物のようなものであり、その贈り物を与えてくださったのがフィッシャー教授だったのだ。

かつてフィッシャー教授も足を運んだフローニンゲン。フィッシャー教授はどのような表情の空を見ていたのだろうか。仮に表情は異なれど、私は今、フィッシャー教授が見たであろう同じ空を眺めている。フローニンゲン：2020/5/11（月）19:44

5820. カート・フィッシャー教授の追悼論文集：今朝方の夢

時刻は午前5時を迎えた。昨夜就寝前に小雨が降っており、その雨音に耳を傾けながら就寝した。一夜が明けてみると、今は雨が止み、風も全くなく穏やかな世界が広がっている。ただし、今日も午後から小雨が降る時間帯があるようだ。本日の最高気温は12度、最低気温は2度とまたしても肌寒い1日となる。

昨日、私をオランダに導いてくれたと言っても過言ではないカート･フィッシャー教授がお亡くなりになられたことについて言及していた。フィッシャー教授の追悼論文集にあたる形で、先日、“Handbook of Integrative Developmental Science: Essays in Honor of Kurt W. Fischer (2020)”が出版された。この書籍は学術書に定評のあるルートリッジ出版から出版されており、論文の寄稿者が錚々たる顔ぶれであり、フィッシャー教授の功績を再度辿る意味でも近々購入しようかと考えている。論文の寄稿者は、フィッシャー教授と長年協働研究をしてきたフローニンゲン大学のポール･ヴァンギアート教授を始め、フローニンゲン大学でお世話になっていたヘンデリアン･スティーンビーク教授や私の論文アドバイザーを務めてくださっていたサスキア･クネン教授などがいる。その他にも、教育哲学者のザカリー･スタインや、以前務めていたマサチューセッツ州にある発達研究機関レクティカの設立者であるセオ･ドーソン博士も論文を寄稿している。今週末に書籍を一括注文しようと考えていたので、その際に注文したいと思う。

遠くの空が少しピンク色に染まり始めている。外の世界に耳を澄ますと、小鳥たちのさえずりが聞こえてくる。4時半に起床した時にもすでに小鳥たちは鳴き声を上げていた。

今朝方の夢。夢の中で私は、実際に通っていた小学校の教室にいた。その時の時刻は早朝未明のようであったが、友人である生徒たちが何人か教室にいた。彼らが私に何時に学校に来たのかを尋ねてきたので、朝の2時半だと伝えた。私は2時半に学校のグラウンドにやって来て、とんぼかけをしていた。小一時間ほどとんぼかけをして汗を流したところで、教室にやって来たことを伝えた。彼らはそんなに早くに学校に来ていたことを驚いていたが、私にとっては普通のことのようだった。誰もよりも早く学校にやって来て、自分がしたいと思う取り組みに従事すること。それを当たり前だと思っている自分が夢の中にいた。

この夢について改めて振り返ってみると、今の自分の何かしらの側面を象徴しているように思う。朝早く起床することや、そこから誰の目にもつかないところで黙々淡々と自分の取り組みに従事し続けていること、しかもそれを嬉々として行っていることなどが日頃の自分の姿を表しているように思えた。

その他にも夢を見ていた。次の夢の場面では、中学校時代にお世話になっていた個人塾にいた。そこは友人の父親が経営している塾であり、そこで3年間ほどお世話になった。友人の祖父が経営する酒屋の上の階が教室になっていて、夢の中の私は教室にいた。教室では先生がホワイトボードに数学の問題を板書していた。どうやらそれは幾何学の証明問題のようだった。

問題をまずは書き写し、そこから問題を解くという流れになっていたのだが、ホワイトボード上に見慣れない記号があった。それは「III」というものであり、その記号の読み方と意味について尋ねようとしたところ、先生の息子である友人が、それは「ゴルバチョフ定数」だと述べた。その定数の名前を初めて聞き、最初は不思議に思った。その意味について尋ねることをせず、とりあえず自分でその意味を考えてみようと思った。すると、いつの間にか塾の時間は終わっていて、教室を後にしようとすると、先生が私を呼び止めた。

そういえば、ちょうど私は大学から合格通知を得ていたところだったので、志望大学に合格したことを先生に伝えた。すると先生は一瞬驚いたような表情を見せ、そこから祝福の言葉を一言述べた。

すると先生は即座に、今度塾の掃除と合わせて、私のために誕生日会を開いてくれるとのことであり、日程を調整しようと述べた。大学の合格祝いではなかったが、誕生日を祝ってくれることは有り難いと思ったので、私はその場で先生と日程の調整をした。フローニンゲン：2020/5/12（火）05:44